書評　『映画で見なおす同時代史』
（梅野　正信，静岡学術出版，2017 年 8 月，143 頁，700 円＋税）
Masanobu　UMENO（2017）The same period history which I review it by a movie

真島　聖子（愛知教育大学）
Reviewed by Kiyoko MAJIMA

本書は，梅野正信氏が，2009 年から 2012 年にかけて『季刊人間と教育』（民主教育研究所）に連載した映画紹介の中から 12 作品，『季刊教育法』（エイデル研究所）に連載した映画評から 2 作品選んで記述全体を書き直し，新たに 1 作品書き起こしたものである[(1)]。

本書のタイトルに「同時代」という言葉がある。1955 年に長崎で生まれた梅野氏にとって，「同時代」とはいつのことなのか？「同時代」の何を取り上げるのか？なぜ，「同時代」の歴史を映画で見なおすのか？本書のタイトル「同時代」に着目しながら迫ってみたい。

1　「同時代」とはいつのことなのか？

本書で取り上げられた映画の舞台は，1935 年～1994 年である。梅野氏が生まれる 20 年前からおよそ 60 年間を同時代として捉えていることが分かる。しかし，梅野氏が取り上げる同時代は，映画の舞台となる事件が起きた時のみを対象としているわけではない。事件の後，人々の記憶に刻まれ，感情に押し込められ，時に忘れ去られようとし，時に忘れまいとすることを繰り返しながら，長い年月をかけてようやくその事件を自分の問題として引き受け，自分たちの国の歴史として向き合い，反省し，事件の犠牲者や抑圧・差別されてきた人々に謝罪をし，自国史として位置づけなおし，再評価する過程までも含んでいる。

さらに踏み込んで解釈すれば，本書で取り上げられた映画の舞台となる事件に対し，自分の問題として向き合うことなく目を伏せ，避け続けてきた私たち，反省や謝罪の言葉を拒み，自国の歴史の外に排除し続けてきた私たち，今という時代を生きる私たちをもその射程に含んでいると考えることができる。また，本書を通して，本書で取り上げられた映画を通して，自分の問題としていかに向き合い，引き受けていけばいいのか，同時代を生きる一人として，ここから何を学び取ればいいのか，私たちの国の歴史，私たちの世界の歴史として，どのように位置づけ，後世につないでいけばいいのか。このような問いに真摯に応えようとする私たちをも含んでいると考えられる。

つまり，本書における同時代とは，1935 年～1994 年の映画の舞台となる事件が起きた時代であるとともに，長い年月をかけて事件に向き合い，反省し，謝罪をすることで自国の歴史に位置づけなおす時代でもあり，さらに事件の記憶を人々の心に刻むべく映画作品として表現し，語り継ごうとする意思をもった人々が生きる時代と捉えることができる。

2　「同時代」の何を取り上げるのか？

梅野氏は事実を重視する。梅野氏が本書において取り上げた事実は，「特定の国，あるいは特定の地域にあって，長い年月の間公的に表明することを許されず，顧みられなかった歴史的事実」であり，「その国の，ある地域の人々は誰もが知っており，知っていて公言することを禁じられ，いつか事実の明らかにされることを願っていた事実」である[(2)]。

梅野氏が本書で取り上げた事実とは，1935年日本軍による中国人毒ガス実験，1940年ソ連軍によるポーランド人の虐殺（カティンの森事件），1942年フランスにおけるユダヤ人一斉検挙（ヴェル・ディブ事件），1942年フランスにおけるユダヤ人の強制収容所への移送，1943年ナチス政権下のドイツの抵抗運動（白バラ運動），1945年日本軍による沖縄住民の虐殺，1947年台湾軍による台湾人掃討作戦（台湾二二八事件），1950年韓国軍による北朝鮮に同調する韓国人の虐殺（保導連盟虐殺事件），1951年イギリス統治下のケニア人に対する収容所での虐待，1956年ハンガリーにおけるソ連軍の軍事介入（ハンガリー事件），1958年広島の被爆から13年目に原爆症で亡くなった女性，1966年文化大革命による糾弾，1972年イギリス鎮圧部隊による北アイルランド人の虐殺（血の日曜日事件），1980年韓国の鎮圧軍による光州市民への銃撃（光州事件），1994年ルワンダにおけるツチ系住民の虐殺と国連安保理の支援縮小である。

本書では，映画で十分に描かれなかったもう一つの事実にも注目する。それは，事件の後，長い年月を経てようやく行われた反省と謝罪の事実である[3]。1990年「カティンの森」の責任をソ連が公式に認め，ゴルバチョフ大統領が謝罪をした事実。1989年ハンガリー事件で失脚したイムレ・ナジが名誉回復を得た事実。1995年中華民国政府総統の李登輝が台湾二二八事件を不当な虐殺であったと政府として謝罪した事実。2008年韓国の慮武鉉大統領が朝鮮戦争下の韓国で起きた保導連盟虐殺事件に対し謝罪をした事実。2010年イギリスキャメロン首相が政府として初めて血の日曜日事件の犠牲者に謝罪をした事実。2002年ケニアのムワイ・キバキ大統領によって長年テロ組織とされてきたケニア・マウマウを再評価した事実。1981年中国共産党による歴史決議によって文化大革命の再評価がなされた事実。1993年光州事件で逮捕された金泳三が韓国の大統領になり，暴動とされていた光州事件が光州民主化運動へと呼称を変えた事実。1995年フランスシラク大統領が，ヴィシー政権下のパリ一斉検挙はフランス国家の責任であったと謝罪した事実。このような一つひとつの事実の積み重ねが，人々の記憶を同時代の歴史として位置づけ，抑圧や差別を受けた人々を解放し，犠牲者の名誉や尊厳を回復させている。

3　なぜ，「同時代」の歴史を映画で見なおすのか？

梅野氏が同時代の歴史を映画で見なおそうと試みる理由の一つとして考えられるのは，非常に厳しい現実が目の前に突き付けられていてもなお，人としての良心を捨てずに生き抜く姿を見るからではないだろうか。映画「白バラの祈り　ゾフィー・ショル，最期の日々」では，死刑を宣告する裁判官を前にして，「『法律は変わっても良心は変わりません』『ナチが精神障害の子どもたちを毒ガスで処理したと聞いたとき，どれほどショックを受けたことか』」と裁判官に答えるゾフィーの台詞を取り上げている[4]。また，映画「おじいさんと草原の小学校」では，僻地への転勤をもって脅されながらマルゲの退学を決断するように迫られた時のジェーンの台詞「『その答えは簡単よ』『彼を追い払いたくないの』」を取り上げ，梅野氏は，「あたりまえの言葉を口にし，行動する人が，同じ時代にいるのだと思うことができる。それだけで，救われる気持ちになる」と述べている[5]。

また，もう一つの理由として考えられるのは，映画が問いかけるメッセージと映画を通して梅野氏が問いかけるメッセージを読者に伝えようとしているのではないだろうか。例えば，映画「戦争と人間」では，昭和初期の新興財閥五代産業の二男，五代俊介が盧溝橋

事件の直前，大学生の抗日デモを前に「高畠さん，あなたならどうしますか，彼ら支那の民衆に銃を向けますか，戦場で彼らに向かい合ったとき，僕はどうすればいいんだ」という台詞を取り上げ,「〝自分はなぜ罪のない人を殺すことができるのか〟という問いとなって現れる」と述べている[6]。映画「黄色い星の子供たち」では，1942年7月16日，フランス警察がユダヤ人の一斉検挙を行い，8000人のユダヤ人をヴェル・ディブ（冬季自転車競技場）に押し込んだことで，下水管は詰まり，スカートをおろしてバケツに用を足す女性の姿が映し出される。このシーンを取り上げて,「人としての尊厳を冒涜するようなことが，人が人になす業として許されるのだろうか」と梅野氏は問うている[7]。

さらに，もう一つの理由として考えられるのは，映画を媒介にすることで感情移入がしやすくなり，同時代の歴史を共感的に理解し，捉えることができるようになるからではないだろうか。例えば，映画「非情城市」を取り上げて，梅野氏は,「映画は，抵抗し，処刑された人々を，あからさまには描かない。言葉の話せない文清の悲しい表情と，文清に思いを寄せる寛美の日記を読み進める形をとって，静かに説明していく。そのことがかえって，台湾の人々の悲しみを際立たせ，印象深いものとしている」と解説している[8]。また，映画「夕凪の街　桜の国」を取り上げて，梅野氏は,「原作と映画は，大田のように，突き放すように告発をすることはない。こうの史代の思いでもあるのだろう。被爆者の言葉の一つ一つが，抑制のきいた，何か観念したような，優しい言葉に置き換えられている。それでも，この人々が生きた時代に向けるまなざし，原作者の思いが伝わってくる」と述べている[9]。あえて，感情を抑制し，静かに語りかけることによって熱く伝わるものがある。

以上，本書のタイトル「同時代」に着目しながら，3つの問いについて検討してきた。本書は,「人はいかに生きるべきか」を問う書であると同時に，その歩むべき道筋を照らす書であるともいえる。

なお，本書の構成は次の通りである。

1戦争と人間（日本），2カティンの森（ポーランド），3黄色い星の子供たち（フランス），4愛と哀しみのボレロ（フランス），5白バラの祈り　ゾフィー・ショル，最期の日々（ドイツ），6ひめゆりの塔（日本），7非情城市（台湾），8ブラザーフット（韓国），9おじいさんと草原の小学校（ケニア），10君の涙ドナウに流れ（ハンガリー），11夕凪の街　桜の国（日本），12さらば，わが愛　覇王別姫（中国），13ブラディ・サンデー（北アイルランド），14光州5・18（韓国），15ホテル・ルワンダ（ルワンダ）

注

（1）梅野正信『映画で見なおす同時代史』静岡学術出版，2017，p.139。
（2）同上，p.7。
（3）同上，pp.7-10。
（4）同上，p.52。
（5）同上，p.88。
（6）同上，pp.15-16。
（7）同上，p.31。
（8）同上，p.68。
（9）同上，pp.103-104。